

僕の名前は岡崎駿一。身長183cm、スキーと野球で鍛えられた体に自分でもウットリしちゃう23歳です。昨年5月下旬から7月末までヨーロッパ中部の農場で、伝統と近代文化の狭間をしつかりと感じてきました。

男と思われなかったのか あのときの衝撃

昨年の春に札幌の大学を卒業して実家の北見市常呂に戻り、タマネギとビートの苗づくりから始まり、麦の追肥、タマネギ移植、ビート移植が終わるともう5月の連休は終わっていました。

ヨーロッパ農業研修は父から強い要望があったからです。今回行くことになったオランダとドイツの農家を紹介してくれた長沼のあの人は「ヨーロッパ農業を勉強するのも重要だ、何がダメで何が良いのか将来イヤでも理解できるから」。奥歯手前の糸切り歯でも砕けそうにない表現に、私はまったく何を言っているか理解不能でした。

でも学生時代にスキー遠征でヨーロッパには4回ほど行き、多くの国の山を征服したつもりでしたので、多少のことではビビることはない自信がありました。

冬のオーストリアでは、何の前触

れもなく衝撃の事件に遭遇しました。

日本人男子学生3人がゴンドラに乗りこみベンチシートに腰を沈めると、続けてヨーロッパ金髪・ブルーアイの女性3人組が反対側のシートに。ヤッパリ金髪・ブルーアイはいいよな〜と思った瞬間、女性3人組が服を脱ぎ始めたのです。そうなんです、スッポン状態。大和男子は興奮してオッ勃つ暇もなく、ただ目のやり場に困ってしまいました。わずか2分くらいの間に彼女たちは私服からスキーウェアに着替えたのです。

こんなこともありました。スキーヤーのたまり場になっているホテルにはシャワーが部屋になかったので、ヨーロッパ女性たちはシャワールームと部屋の間をペラペラのタオルでケタケタ笑いながら歩いているんです。これが普通なのか、我々を男と見ていないのか今でもわかりませんが、将来の日本も同じようになるのかと思うと期待と不安でいっぱいです。

Vol.107 ヨーロッパ研修の 貴重な体験



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

オランダ ヤンの農場

5月19日にフィンランド経由でアムステルダムに向かいました。空港のミーティングポイント近くのパーガーキングでオランダ人農家ヤンと初めて会いしました。父や長沼のあの人は何度か会っている相手なので、ヤンも緊張なく受け入れてくれた雰囲気でした。

ヤンはタマネギ、ビート、

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

食用のイモをやっています。150年前は湖だった干拓地です。

ミニバンで1時間半、ヤンの自宅に着くと奥さんのサーキヤがスープを作って待っていてくれました。このスープが旨い。野菜ベースにベーコンの香りがして今まで味わたことがないシンプルな料理でしたが心温まる絶品でした。

ヤン夫妻の子供は独立し、家にいるのは学生で身長195cmある18歳のやんちゃんニツクだけでした。ですの翌日からの農作業はヤンと二人で行なうことになります。

農地は300×800mで24haのみ。正直小さいです。宗教絡みなので、日曜日は安息日で働かないのでサイクリングで50kmくらい簡単に遠出することもありました。

イモのカルチ作業(中耕)で部品交換が必要になったときのこと。簡単な部品だから在庫はあるんだろうと思いましたが、残念ながら、私が20km離れた町まで取りに行きました。次の日には違うところが壊れ、やはり部品の在庫はないのでまた引き取りに。そんなことが何度も続き、取り付け作業で4時間くらい必要です。

ヤンにその辺のことを聞いてみると「24haくらいの規模だとこれでや

っていきけるんだよね」。やはり疑問です。この辺のことは農業というよりもトヨタの組み立て工場の在庫管理方法を学ぶと自ずと答えは出ると思うのですが。

ある朝起きると右下の奥歯が痛くなりました。海外旅行保険はもちろん加入していたのですが、歯科の治療は入っていませんでした。心配してくれた奥さんのサーキヤに近くの歯医者者に連れていかれました。

なんと診療拒否! どうも親知らずらしく、ズッキンズッキンと痛みます。自腹で払うから何とかしてって言っても外国人だし、保険は入っていないからダメ言われるし。

そこでサーキヤが次の歯医者に連れて行ってくれました。なんとそこも治療拒否! とりあえず痛み止めの薬を飲んでその後6週間耐えました。ヨーロッパはいつた誰のため最先端医療なのでしょうかね。

もちろん楽しいこともありましたが、バレエやサッカークラブとの交流もあり金髪・ブルーアイとの交流は貴重な経験でした。

何だかんだで1カ月が過ぎ、次の研修先のドイツ・ハノーバー近くの農家に行くことになりました。一人で行くのは大変だということですが、サーキヤ、ニツクも同行してくれました。

ドイツ農家の家族が急に黙り込んだ理由

ドイツのヘニングスの農場は人口500人くらいの小さな町の外れにありました。到着して夕食はヘニングスの奥さんハイデイが作った猪のスープ。これまた絶品でした。

次の日から早速仕事です。その前にドイツの朝食です。ハム、チーズ、黒パンにコーヒーが定番です。麦刈りまでは3週間くらいあったので、乾燥場の掃除や機械のメンテナンスを中心にやりました。

今でも不思議なことは農薬嫌いなのに乾燥場の内部に殺虫剤を散布して特定の害虫駆除を事前に行なうことでした。

このドイツの農場では200haを超える面積だったのでそこその機械があり、予備部品もある程度保管していました。やはり農業にはある程度の規模が必要なのでしょう。

そんなことをしていると7月10日くらいになりドイツの夏を迎えました。次の日からはエン麦の収穫をクラーズコンバインでやりました。私は収穫されたエン麦をトレーラーに積み込む作業を任せられました。この仕事をやっていたおかげで2カ月後に行ったアメリカの収穫作業でも慌てることはありませんでした。

あるとき「日本人だから寿司を作れるんだろ?」ということになり、奥さんのハイデイがスーパーに売っていた寿司キットなるものを買ってきて、付属で付いていたハチマキ姿で初めて寿司を握りました。とっても手巻き寿司だったので簡単に作られてみんなも喜んでくれました。

実は研修先がもう1カ所ありました。父が北見のビート会社を通じて農家を紹介してくれたので、そこにも10日ほど行くことになりました。そこはドイツ北部の起伏が少ない地域でした。

この農場に行く前にヘニングスから「次の農場はどこに行くんだ」と聞かれ、ハンブルグ近くのコンラッド農場と普通に伝えました。その瞬間夕食をしていたヘニングスの家族が急に黙り込んでしまったのです。

最初は発音を間違っただけだと思いましたが、そうではなかったのかと思いましたがそうではありませんでした。次の日、ヘニングスの息子ヤン(オランダ人のヤンではない)から「実は妹のマリーの元カレなんだよ」と聞かされびっくり。

ドイツは案外狭いですね。ネタをくれた父さんに感謝すべきか、余計なことをしてくれただと伝えるべきか。皆さんも元カレ、元カノとはうまくやってくださいね♡